平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金
（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）
分担研究報告書

子宮頸がんワクチン接種歴のある若年女性にみられた神経症状に関する自律神経および高次大脳機能の評価

研究分担者　桑原 聡　（千葉大学医学部附属病院神経内科教授）

研究要旨
子宮頸がんワクチン接種後に神経障害を呈した症例について、各種生理学的検査および高次機能検査を行ない、体位性頻脈症候群と情報処理速度の低下を比較的高頻度に認めた。

A．研究目的

子宮頸がんワクチン接種後にみられる神経障害は、症状が多彩かつ経過が長期にわたること、脳MRI異常、血清学的異常などの検査所見に乏しいことが、病態の把握をより困難なものにしている。子宮頸がんワクチン接種後神経障害患者を自律神経機能、高次大脳機能の面から評価する。

B．研究方法

当科を2015年4月から2016年12月までに受診した、子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑われた症例について、後方視的に臨床症状、各種生理学的検査および高次大脳機能検査（WAIS-□）の検討を行なった。

（倫理面への配慮）
個人情報に関する厳重な配慮を行った。疫学研究に関する倫理指針に基づき、研究を行なった。

C．研究結果

受診した18例のうち、他疾患と診断した3名を除く15例を対象とした。初診時年齢は中央値17歳（範囲16-20歳）、初回ワクチン接種から症状出現まで中央値10ヶ月（範囲0-46ヶ月）であった。
対象とした15例中10例で四肢の広範な痛み、9例で頭痛、睡眠障害、易疲労性および不随意運動、6例で立ちくらみや頻脈などの自立神経症状、6例で高次大脳機能障害の訴えを認めた。
また通学や就労などに影響があったのは 93%であった。生理学的検査では、12例中7例（58%）に異常を認め、最も多かった所見は体位性頻脈症候群（POTS: postural tachycardia syndrome）であった（12例中6例、50%）。
また高次機能検査（WAIS-Ⅲ）では9例中6例で処理速度低下を、2名で作動記憶の低下を認めた。

D．考察

子宮頸がんワクチン接種後にみられる神経障害が疑われる患者の一部において、自律神経機能検査および高次機能検査で異常を認めた。今後より多数例での検討が必要と考えられた。

E．結論

子宮頸がんワクチン接種後にみられる神経障害が疑われる患者において、自律神経機能および高次機能は比較的高頻度に障害されている可能性がある。

F．研究発表

1. 論文発表
   なし
2. 学会発表
   なし

G．知的財産権の出願・登録状況

特記すべきことなし